

吉藏經典觀の背景

——天台五時説との類似——

末光愛正

序

吉藏（五四九—六二三）の最初期の著書である『法華玄論』中に、「信解品譬喻」（卷七）がある。この譬喻の次第順位は、父子相失・相見の後、初成道時（華嚴）↓人天教↓二乗↓波若↓浄名等↓法華となつてゐる。この順位は慧観の五時説の華嚴↓三乘別教↓般若↓浄名思益↓法華↓涅槃の順位とほぼ類似する（三論玄義 大四五・五中）。

吉藏が經典説示順位を一応認める立場に立つ理由は、法華經涌出品中に「從是已來始過四十余年」等々の説示順位を決める語句が、經論中に存在した事によるものと思える。しかし、吉藏と慧観との説示順位が類似したとしても、經典觀は全く異なる。この点を明確にし、又天台五時説との類似を指摘する。

一 慧観と吉藏における經典觀の相違

第一の相違は華嚴の位置付けにある。慧観は華嚴を他の經典と別格に扱い、頓教の位置に据え付けた。しかし、吉藏は「華嚴之与法華一同一因一果」教滿理円無余究竟」（玄論 大三四・三六六中）と、華嚴法華を共に一因一果を説く同価値のものであると述べてゐる。しかも「然法花結束一化」該羅頓漸」（法華遊意 大

三四・六三五中）と、法華も頓教であるとすら主張している。

第二点目の涅槃經の位置付けは、更に特徴が顕著である。慧観は涅槃經を最後の常住教とし、最高の位置に据え付けた。これに對し、吉藏の「信解品譬喻」は法華までで終り、涅槃が省略され、「然此八譬總攝二化始終略尽也」（大三四・四一六上）と、法華までで釈尊の教化は完結していると述べてゐる。この涅槃省略は、三種法輪、三引法門、如來十種大恩（全同卷一）等の主張に見られる吉藏の重要な命題である。

法華で完結し涅槃省略の理由は「問若此經（法華）已明仏性。涅槃何須復説」答若已了悟者不須涅槃也」（同・三六七上—中）と、涅槃經で説く仏性を既に法華經が説いてゐる為と述べてゐる。又涅槃省略の根拠を「問何以知至法華即了悟不須涅槃耶答（中略）又過去二万日月燈明仏説法華竟便入涅槃故聞法華經已究竟悟不須説涅槃也、又迦葉仏時雖有涅槃而不説之故知法華是了義教（後略）」（前同頁）と、法華經序品（大九・三下—四中）、涅槃經梵行品（大十一・七一五中）等の文を以つて正統化してゐる。又不必要である涅槃を補足する理由は、「一歷教不悟緣（中略）此是最鈍根人。至涅槃方悟也、二者前已得悟今至涅槃更復進悟（後略）」（同、三七三下）と、法華で悟らない鈍根人の補足の為に追説する等と解釈してゐる。

二 吉藏經典觀主張の理由背景

吉藏は涅槃經を補足の教えと断定したが、しかし、「答教非淺也、但於緣悟故転勢説之（中略）猶是一正道利者前悟、鈍者後悟涅槃法華更無異也」（前同頁）と、法華涅槃の教えの内容を等価値に見、優劣は教えを受ける側の機根によるものと主張してい

る。吉藏には「今明是經（法華）究竟法身 百非不非 百是不是 与_二大經及華嚴_一不異」（同、三七八中）等の文章が存在し、全ての諸の大乗經典を等価値、即ち「諸大乘經顯道無異」（平井俊栄『中国般若思想史研究』四八二頁以下参照）と主張し、多門あるは機根に応じる為と述べている。

即ち、吉藏の經典觀は慧觀の五時說法の次第相生を一応認めるものの、大乘經典相互内容の優劣を評価するものではなく、機根の優劣を認めるだけのものである。

吉藏が「諸大乘經顯道無異」と主張したその理由は、慧觀が「始從_二鹿苑終_一竟鵝林」自_レ淺至_レ深 謂_二之漸教_一（中略）次云_二大品是三乘通教_一（後略）」（大四五・五中一下）と、自_レ淺至_レ深と教の内容に優劣をつけ、しかも、般若教が一番劣る三乘通教であると位置付けたことにほかならない。般若に立脚する三論学としては、諸大乘經顯道無異と主張することにより、經典内容の優劣から機根の優劣の価値体系に切り換えた。これによつて三論の立場の劣勢を回復しようとしたのである。

特にこの五時説は、法雲等の成実論師によつて盛んに唱えられ、三論の地位が脅かされていたと云う切実な背景が存在したからにはかならない。

三 天台五時説との類似

天台宗の教判は五時八教説として知られ、法華玄義卷十に詳説されている。勿論、天台と三論の教判、經典觀は異なるが、次の点では極めて類似している。

第一の類似は立場の共通性にある。法華に立脚する天台宗は、般若より高い第四時の説である。しかし、華嚴・涅槃より劣ると云う

点では共に一致し、慧觀の五時説、又これを唱える成実論師を論破し、自説の優位を主張する動機が共に存在した（安藤俊雄『天台学』「天台の教判」五四—八一頁参照）。

第二点目は五時説否定方法の類似である。天台の五時判は説法の次第相生を区別するもので、教説内容の濃淡優劣を評価するものではない。後代約機濃淡・約教相生と云われる經典觀である。特に安藤博士（前同書）は、天台五時判の二つの重要な目的として、（一）頓教華嚴の地位を、五時判中の第一時の説法と位置づけ、別格の地位を否定した事。（二）最後の常住教として特権的地位を与えられていた涅槃經を、追説追泐の教えとし、法華を以つて完結したと指摘している。これらの事は、前記の吉藏の思想と類似するものである。

第三は、涅槃追説追泐説の根拠となる引用經典が一致する。吉藏が涅槃省略の根拠として、法華經序品の趣意文と涅槃經の文を引用していることを述べた。天台の玄義中にも「又燈明仏説_二法華經_一。竟即於_二中夜_一唱入_二涅槃_一。彼仏一化 初説_二華嚴後説_一法華_一。迦葉仏時亦復如是。悉不_レ明_二涅槃_一。皆以_二法華_一為_二後教後味_一」（大三・八〇八上、並七〇四中等）と、同内容の引用經典が組で一致している。この一致は、以上の類似が偶然によるものではなく、直接的な係わりがあつたことを裏付ける。

結 言

法華玄論中に、吉藏の經典觀が如実に記され、天台との類似を概説した。灌頂がこの法華玄論を天台の玄義中に多数引用していることが指摘されている（佐藤哲英『天台大師の研究』三二—一頁等）。この指摘に基づく、天台五時説の骨子は、吉藏の影響によつて成立した可能性が生じる。検討を要す。

（駒沢大学大学院）